

Thomas Cole の弟子としての Frederick E. Church

高橋 順子

ハドソン・リバー・スクールのメンバーの中で、Thomas Cole に次いで、またはその全盛期には彼を凌ぐほどに名声を馳せたのは Frederick E. Church (1826~1900) であった。Church はコネチカット州ハートフォードに生まれ、早くから絵画に関心を持ち、Cole のパトロンであったハートフォードのコレクター、Daniel Wadsworth の紹介で、18歳の時 Cole の弟子となった。それからおよそ2年間 Cole のもとで絵画を学び、彼の初期の作品には風景の構図のとり方などに Cole の影響がみられる。

例 1. Church: *View Near Stockbridge* (1847)

Cole: *The Oxbow* (1836)

手前の小高い場所から果てしなく続く遠景（川、森、畑、山、広い空と、雲）を描いたもの。

例 2. Church: *Storm in the Mountains* (1847)

Cole: *Tornado* (1835)

嵐で折れた大木を前景に、谷をわたる嵐のさまを雲の流れで描いたもの。

例 3. Church: *New England Scenery* (1851)

Cole: *Home in the Woods* (1847)

開拓者一家と丸木小屋、木の橋、放牧された家畜、幌馬車、開墾途中の土地など、その当時の人々の生活をあたたかい色合いの夕日の光線で全体をつつむように描いたもの。

例 4. Church: *Christian on the Borders of the “Valley of the Shadow of Death”* (1847)

Cole: *The Pilgrim of the World at the End of His Journey* (1846～48)

巨岩が両側に迫る道を行く pilgrim がやがて到達するであろう終焉のときを暗示して、幻想的に描写している。岩山の威圧感、pilgrim の孤独、荒涼とした風景、その先に待っているはずの未知のものに対する恐怖感を描写したもの。

当時すでにアメリカの風景画家として傑出した名声を与えられ、もっとも油ののりきった時期にあった Cole の弟子となるにあたって Church は、自分の最高の目的は風景画において秀でた画家になることであり、収入のためではなく賞賛されるためでもなく、目標はさらに高いところに置いているのだと Cole に書き送っている。Church は著しく才能を伸ばし、師である Cole は画家として世界中でもっとも精巧な目をもっていると賞賛した。こうして Church は Cole のもとで多くの風景画を Cole が理想とした “higher style of landscape”, ただ風景をそのとおりに描くのではなく、さらに哲学や、思想や、情感をも描写する様式を極めていった。

Church がどれほど Cole を尊敬していたかを示す例として、彼が晩年になってシャパロンのひとりに宛てた手紙に、“Thomas Cole は自分があとにも先にももっとも賞賛する画家である” と書いている。

また、彼が1845年頃描いた *Portrait of Thomas Cole* は、うつむいて右手を側頭にあて読書でもしているような Cole をスケッチしたペン画であるが、Cole の誠実で温和な性格が、やさしく柔らかな線で描写されている。この作品は描者のあたたかいまなざしが感じられる。おそらく Church でなければ描けなかったものであろう。

1848年 Cole の死後、Church は *To the Memory of Cole* という作品を描い

た。これは、初期の Cole および Church がよく使った構図で、手前の小高い場所から遠景が広がるもので、Church らしく画面の半分は空に向かって立ち上ってゆく白い雲の図になっている。そして、画面正面に Cole の墓を表す十字架が陽の光をあびてくっきりと描かれている。Cole の死を悼んで親友の Ashur Durand (1796~1886) も *Kindred Spirits* (1849) という作品を描いている。これは Cole の愛したキャツキルの山中に、親しかった詩人の William Cullen Bryant (1794~1878) と Cole が深い谷間を見下ろす岩の上に立って語り合っている場面である。これは Durand の Cole への思いを表しており、一方 Church の十字架は彼の Cole への思いであろう。それぞれに亡くなった友への愛惜の情が伝わってくる作品であるが Church の作品には Cole の未完成の作品 *Unfinished Landscape (The Cross at Sunset)* (1847年頃) を連想させるものがある。川（おそらく、ハドソン川）を見渡す丘の上に立つひとつの十字架に、いま、昇ってこようとする朝日の最初の光があたり、十字架が輝きだす瞬間を描いている。川の向こうには山々（おそらく、キャツキルの山々）が連なり、その背後から昇る朝日にシルエットになっている。前景も、遠景も、十字架も、細部の描写は何もないが、画面の右手に大きく立つ十字架の印象があまりにも強く、これを完成させることなく逝った Cole を思うと、これはある意味では彼の遺書ではないかと思えてくる。そして、この未完成を完成させたのが Church の *To the Memory of Cole* ではないかと思えてくる。Church はおそらく Cole の死後、あの未完の作品を見る機会があったであろう。そして Church なりの構想でこの作品を仕上げ、生涯尊敬しつづけた師であった Cole に捧げたのではないだろうか。

The Past, The Present (1838), *The Departure, The Return* (1838), *The Course of Empire* (1836) など古典的、歴史的な題材を、想像を駆使して描こうとする傾向の強かった Cole に対し、Church は、自分が生きた

時代の新世界の風景に関心を持った。ハドソン川に沿ったキャツキル地方や、ニューイングランド地方だけでなく、ナイアガラ瀑布、南米アンデス地方、南米エクアドルを旅行し、そのたびに、*Niagara* (1857), *Heart of the Andes* (1859), *Cotopaxi*, (1862) というような大作をつぎつぎと発表した。

1848年にはニューヨーク市に自分のスタジオを持ち、彼の作品はよく売れるようになった。まだ20代のはじめであった。春から秋にかけてスケッチ旅行をし、冬はニューヨークのスタジオで製作や画商とのビジネスに費やした。1849年に発表した *Above the Clouds at Sunrise* は、キャツキルの山の上から見下ろす雲海の彼方に昇りはじめた朝日によって、あたりがぼら色につつまれてゆく様を描いたもので、岩や木々の細部の克明な描写、そのあいだに湧き上がる霧や雲や空の色の変化を的確にとらえている。これらの色のバリエーションと雲や霧の形の美しさは、刻々とこれらの色も形も変化してゆくことを暗示し、自然の織り成すドラマを力強く表現している。この作品は The American Art-Union に買い取られた。Cole の歴史画的傾向だけでなく、*The Voyage of Life* (1840) や *The Cross of the World* (1846~48) のような宗教画的な傾向からも離れ、Church は Henry David Thoreau (1817~62) や Ralph Waldo Emerson (1803~82) の超絶論に共鳴し、人と自然が一体化するような思想をキャンバスに表現するようになった。

Church の絵画の特徴のひとつは雲の描写である。画面の半分以上を、朝の光の中の雲 (*Above the Clouds at Sunrise* 1849), 真昼の太陽の中の雲 (*West Rock, New Haven* 1849), 落日のあとの残照に真っ赤に燃え上がる雲 (*Twilight in the Wilderness* 1860) が支配している。その雲は写真で撮ったように精密に、写実的に描かれ、しかも生き生きとしている。Cole が多大な影響を受けたといわれる17世紀イタリアの画家クロード・ロラン

Claude Lorrain (1600~1682) の田園風景を描いた作品群、「イタリア風景」(1630~35頃)、「大きな塔の見える港の風景」(1637年頃)、「笛を吹く人物のいる牧歌的風景」(1635~40頃)、「黄金の子牛の礼拝を伴う風景」(1660)に描かれた概念的な積乱雲の形や、青色のバリエーションだけで塗りつぶしたような雲と空とは、雲を描き出そうとする姿勢がまったく異なっている。Church はハドソン・リバー・スクールの画家たちの中でも、最も美しく壮大な雲を描く風景画家と言われている。その雲が主題の作品の中で、最も高く評価されているのが *Twilight in the Wilderness* (1860) である。これは Church の気に入りの場所、メイン州マウント・デザート島の夕焼けを描いたとされている。画面の半分以上を占め、画面の左から右上に向かってたなびく夕焼け雲は落日の最後の光をあびて真っ赤に染まり、その鮮やかさに圧倒される。そして、その壮大な雲の下に見える地上の風景(山、湖、樹木など)にはすっかり闇が迫ってきている。この光(落日の光を受けている部分)と影(受けていない暗い部分)のコントラストは、さらに夕焼け雲をひきたたせている。

Church にとって Cole との別れは、以外に早く訪れた。彼がマンハッタンにスタジオを開き、弟子まで持つようになった頃、1848年に Cole は世を去った。1850年代になると Church は Cole をはじめ多くの画家たちがヨーロッパへ絵の修業に行ったのに反して、南米、カナダ北部のノヴァスコシア、ニューファウンドランド、ラブラトール島などにも足をのぼし、その結果としていくつかの大作を発表した。1857年には *Niagara* (108cm x 229.9cm) を完成させた。これは、1851年から52年にかけて、何回もナイアガラ瀑布を訪れ、水の流れや滝全体の様子を細部にわたって詳しく観察し、21ものスケッチを作成した後に完成した作品である。Cole にも *Niagara Falls* (1830) という作品があるが、これは滝のまわりの山々の紅葉の場面が主題で、滝は画面の中央を占めるものの、それ自体の壮大さは

抑制されている。しかし、Church の作品は横長の大キャンバスに馬蹄形の滝そのものを大胆な構図でしかも正確な測量をもとに描き、遠景や空は抑えた色合いになっており、虹のかかった滝をさらに力強く浮かび上がらせている。巨大な滝の轟音が聞こえてくるようである。そしてこの画面の枠を越えて滝がなお続いてゆくことを想像させる迫力に満ちている。この作品はアメリカはもちろんのこと、ヨーロッパでも大評判となり、多くの賞賛を得た。

Church は1853年コロンビア、エクアドルを旅し、1857年には再びエクアドルを訪れ、北米大陸と著しく異なる自然に接し、その成果として1859年にアンデスの美しく壮大な田園風景を描いた *Heart of the Andes* (168cm × 302.9cm) を、1862年には噴火山 *Cotopaxi* (121.9cm × 215.9cm) を、1864年には、エクアドル高地に聳える独立峰を描いた *Chimborazo* (121.9cm × 213.4cm) を製作した。この三大作はエクアドル三部作として知られ、人々に異郷の神秘的な美しさを強く印象付けた。この中で特に *Heart of the Andes* は19世紀後半のアメリカ美術界でもっとも話題になった作品である。そのスケールの大きさと、樹木、草、花、鳥、昆虫にいたるまで、細密画のように丁寧に描いた超大作で、世界中の傑作の中の傑作と賞された。1859年にはカナダ北部の極地ニューファウンドランドやラブラトル島を訪れ、1861年に巨大な氷山群をダイナミックに描いた大作 *The Icebergs* (163.8cm × 285.4cm) を製作した。

Church は1867年家族を伴って、イギリス、フランス、ギリシャ、エジプト、シリア、トルコなどに18ヶ月の旅をした。イタリアに深い愛着を示した Cole と異なり、Church はローマにはあまり関心をもたなかったが、アテネのパルテノン神殿遺跡に強く印象付けられ、*The Parthenon* (113cm × 184.5cm) を製作した。これは Church の全盛期最後の大作のひとつと

なった。彼はパルテノンに建築物として強い関心を示し、パルテノンは建築物として人類最高の作品であると、友人への手紙の中で述べている。このあと彼はキャツキルの、ハドソン川を見下ろす高台にある広大な土地に、ペルシャ風の城のような大邸宅を建て、オラーナ (Olana) と命名したが、自ら設計し、デザインしたものの中に、パルテノンの構図も投入されていたかもしれない。その後、手のリウマチの悪化で Church は絵筆をとることが難しくなり、かわりにオラーナの建設に没頭するようになった。

Church が心血を注いだオラーナは、あまりにも広く複雑な設計のため、彼が家族とともに入居したあとも、内装も含めて常に工事が続行中の状態が続き、ついに完成を見ることはなかった。現在オラーナは Church 一族の手を離れ、ニューヨーク州ヒストリカル・ソサイアティの管轄のもとにあり、一種の美術館となっている。かつて馬丁がいた建物が入場券売り場および土産物店となり、かつて厩だった所では Church の業績を解説するビデオを上映している。オラーナ本体の内部も公開されているが、保全のため、館内ツアーは1日数回のみで、1回10人までと制限されている。しかし、外側のバルコニーへは自由に入れて、そこからのハドソン・ヴァレーの眺望は絶景である。ゴルフ場のように広い裏庭から陽光をいっぱい浴びたオラーナを見ていると、これは一般にペルシャ風といわれているが、実際には何風と呼ぶべきなのか分からなくなってくる。基本的、骨格的にはヴィクトリア朝風のヨーロッパ建築で、ファサード、窓枠、入り口などの装飾がオリエント風であるという、まことに不思議な建物である。おそらくこれは、ギリシャ、トルコ、シリアなどの文化に魅せられた Church の exoticism の集大成だったのではないだろうか。Church はほとんど忘れられた画家として世を去ったが、彼が遺したオラーナは連日観光客でにぎわっている。

画家としての成熟期にたった47歳で他界した Cole に比べ、Church は19世紀後半、ハドソン・リバー派の名声が薄れ始めてからもなお四半世紀を生きなければならなかった。Cole 亡き後アメリカ画壇でもっとも高い評価を受けつづけた Church であったが、それ故に晩年は病に苦しみながら、思うように製作も出来ず、長く孤独な日々であったと思われる。彼の名と作品がふたたび脚光を浴びるようになったのは、死後30年を経て、アメリカの“古典”が見直され始めた頃のことであった。

参考文献

- Avery, Kevin J., *Church's Great Picture The Heart of the Andes*, the Metropolitan Museum of Art, NY, 1993.
- Baigell, Matthew, *Dictionary American Art*, Harper & Row, NY, 1982.
- Baigell, Matthew, *Thomas Cole*, Watson-Guptill Publications, NY, 1985.
- Davis, John, *The Landscape of Belief*, Princeton University Press, Princeton, NJ, 1996.
- Kelly, Franklin, *Frederic Edwin Church and the National Landscape*, Smithsonian Institution Press, Washington DC, 1988.
- O'Neill, John P., ed., *American Paradise, The World of the Hudson River School*, the Metropolitan Museum of Art, NY, 1987.
- Powell, E. A., *Thomas Cole*, H. N. Abrams, NY, 1990.
- Vaughan, William, *Romanticism and Art*, Thames and Hudson, London, 1994.
- 「イタリアの光～クロード・ロランと理想風景」, 国立西洋美術館, 1998.